

上田秋成の近江荒都歌論について

山下久夫

1

万葉集巻一の(例) (例)「過_三近江荒都時、柿本朝臣人麿作歌」、および(例) (例)「高市古人感_三傷近江旧都」作歌或書云、高市黒人」は、壬申の乱によって壊滅し今や廢墟と化した大津の宮への感懷を歌ったもので、近江荒都歌と呼ばれている。

上田秋成がこの歌にこだわったのは有名な話。秋成の万葉評釈は「檜の杣」や「金砂」に代表されるが、そこに展開される近江荒都歌論は、単なる評釈ではない。すでに森山重雄氏や野口武彦氏が注目したように、彼は、強引とも思える特異な解釈を施しながら明確な主題を浮かびあがらせた。それは、よく言われることだが、一つの歴史意識に通じるものである。秋成の歴史意識は、〈文獻〉のあり方をめぐって展開する。もちろん、彼が国学と深くかかわっていたからだ。本稿では、きわめて恣意性の強い評釈からうかがえる秋成の意図をさぐり出し、その歴史意識を多少とも垣間見てみたい。

上田秋成の近江荒都歌論について

近江荒都歌論は、「檜の杣」や「金砂」六、そして史論書「遠駝延五登」にもみられるが、ここでは「金砂」六を中心に話をすずめる。近江荒都歌を取りあげる以上、万葉集を直接の対象にした書を選ぶべきだろうし、また、万葉集の歌の配列順に評釈する「檜の杣」よりも、配列順に関係なくある意図の下に選択した感のある「金砂」の方が、秋成自身の意識をみるには適切だと思われるから。さらに、「金砂」六に載る近江荒都歌と関係の深い歌への評釈も参考にしながら、秋成のモチーフを明らかにしてみよう。

2

「金砂」六は、柿本人麻呂の(例) (例)の評釈でまず問をたてる。遷都は、本来吉例であり旧都の荒廢は悲しむべきではないのに、この大津の宮だけがなぜ荒都と書かれ悲しみが歌われるのか。その後、次のように述べて問の答えとした。

蘇我父子の猛威を陥せし。天智の功勳大いなるをあふき

て。聖徳の君と思ひたのめしかは。此御系統を。かきりあらぬ代までと。皆人おもひたりしに。かくすゝろに荒たるを。

見るか悲しと云人々は。己か父兄は。大友の麾下にありて討死せしか。其子は天武に降伏して仕ふれと。壬申の戦ひに功なきは。官祿重からず。人の背に跪坐してそあらめ。さるは大津の宮の昔しのはるゝを。是はた打ひろまりつゝ。歌しひはしけん。朝臣の氏族には。佐留と云人のみ。従四位に叙せられたるか。史に見ゆれば。氏人の世にあはさる事しらる。仍て此悲歌は有へき者也。

さらに続けて言う。この歌は、表には、神武の橿原の宮以来の畿内を離れ畿外の近江に遷都したことが「皇祖神の御心」に違つたせいか突然の戦乱で都は跡形もなくなつてしまつたよ、と詠んでいる。が、心裏では、実は大友皇子側に味方したために滅亡した柿本一族の悲しみを歌っているのだ……と。

⑧・⑨・高市黒人（秋成は古人ではなく黒人としているの
でそれに従う）の歌に対しても、やはり「大友の麾下に亡びし人の一族」である黒人が、柱が倒れ瓦が砕け草蒸て鬼の住処と見違ふような荒都の前に行んで昔を偲び嘆く風に解釈している。

さて、右の秋成の評釈でまず眼につくのは、天智天皇の評価の高さである。近江荒都を嘆く人麻呂の心情に、蘇我父子の横暴を阻止した天智の功勳を慕いその系統の永遠を願つたが果たされなかつた悲しみをみる。

しかし、これは、当時としては聊か特異な評釈なのだ。だいた

い、この歌をめぐる天智の評判は、国学者の間では決して芳しくはない。日本書紀の天智天皇六年（六六七）三月十九日の条に「都を近江に遷す。是の時に、天下の百姓、都遷すことを願はずして諷へ諷く者多し。童謡亦衆し。日日夜夜、失火の処多し」とあるが、この記事を根拠に、近世の国学者たちは天智の叔慮に疑念をあらわす。真淵は直接言及していないが、契沖「精撰本万葉代匠記」が「イカサマニオホシメシテカト云ニヨリテ見レハ、此帝ノ都ヲ遷シ給フ事ヲ少謗レルカ……総シテ都ヲ遷ス事ハ古ヨリ民ノ嫌ヘル事ナリ」と難じるのをはじめ、荷田春満「万葉集僻案抄」、鹿持雅澄「万葉集古義」、富士谷御杖「万葉集燈」等が口を揃えて民衆に多大の負担をかけてまで畿外の地に遷都した天智の叔慮を訝つた。そして、人麻呂の近江荒都歌に遷都に対する諷刺を看取する。

つまり、国学者たちは、秋成が「皇祖神の御心」に違つたせい
か……と軽く流した箇所にしつこくこだわるわけである。そもそも、ここは本歌の「いかさまに おもほしけめか」の解釈上での
言説なのだが、国学者に限らず近現代の万葉研究でもよく問題と
なるこの箇所に、秋成は少しも関心を示さない。諷刺どころか、語
に即した評釈を放棄してまで、ひたすら天智の功勳を強調する。

だが、それ以上に目立つのは、何といつても人麻呂や黒人の境
遇についてだろう。右の文脈では最も比重が大きいと言える。す
なわち、人麻呂の先祖は近江朝に仕え壬申の乱では大友皇子に味
方したために、人麻呂の代になると、天武政権下での敗者の立場

を余儀なくされ、佐留が従四位に叙せられた以外は一族は皆不遇に甘んじざるを得なかった、とする説。「其子は、天武に降伏して仕ふれと。壬申の戦ひに功なきは、官禄重からず。人の背に跪坐してそあらめ」が最大のポイントなのは疑いない。むろん、黒人も同じ。

だとすると、亡き近江朝を悲しむ人麻呂や黒人の心情には、当代天武政権下での不遇がもたらす「慷慨の情」がこめられていることになる。現に秋成は、巻三箇の穂積老作「我いのち真さきくあらは又も来ん志我の 大津によするしら波」をあげて、これを「壬申の乱に慷慨の情なき人」の詠歌だと難じ、逆に人麻呂や黒人の近江荒都歌から「慷慨の情」を際立たせている。

いうまでもなく、このような人麻呂や黒人の境遇論も、他に類例のないものだった。両者とも、〈正史〉に記載をみない伝未詳の人物だが万葉集の歌から推して持統および文武朝に仕えた低身分の宮廷歌人、というのが大方の見解。人麻呂に関して、国学者は、出身舎人身分六位以下と推測し得る以外はすべて伝未詳とする真淵説をほぼ了解していた。

したがって、人麻呂や黒人が、宮廷歌人として天武や持統を賛えこそすれ、敵朝下での意に添わぬ出仕で常に「慷慨の情」を抱きつつ歌っていた、などとは誰も考えはすまい。当の秋成自身すら、文献上からは大方の見解以上には出られないと知っていたはずで、彼が万葉研究を始めて間もない天明五年（一七八五）刊の『歌聖伝』一卷をみれば明らかだ。後世の碑文・伝承・伝説にまで

手を広げて迫ろうとした人麻呂伝は、結局は、後世の「浅陋附会」は何ら証拠とならず律令の古文獻に即して伝未詳とすべきだ、という国学者流の結論にとどまる。

ならば、天武政権下で「官禄重からず。人の背に跪坐してそあらめ」という人麻呂や黒人像は、文献上の事実を承知した上での完全な秋成の創作だと考える以外にない。むしろ、①〈正史〉から洩れている、②伝未詳である、といった条件が、敵朝下で呻吟する像の創作に彼を駆りたてたものと思われる。

ただ、不思議なことに、近江荒都歌以外の人麻呂や黒人の歌に對する秋成の評釈からは、右のような像はまったく導き出せないのである。『金砂』七には、冒頭から三十首ほど続けて人麻呂歌への評釈が並ぶ。持統天皇の吉野行幸従事、輕皇子の安騎の野宿り、藤原宮御井歌と藤原宮役民作歌（秋成はいずれも人麻呂作とする）、高市皇子殯宮の歌……。つまり、天武朝の系統を賛える歌が続く。これらの歌は、真淵をして格調高き「歌聖」としての人麻呂像を定着せしめたが、秋成の持論でいけば、事情はだいぶ違ってくるはずだ。すなわち、王朝を賛える高い格調は、まさに敵朝下での不遇がもたらす「慷慨の情」を内包していなければならないまい。「歌聖」人麻呂の表現は、屈折やイロニーに充ちたものとなるのではないか。

しかし、「檜の杣」も含めて、秋成の評釈のどこにもそれは見出せない。「朝臣の巧妙是を見て歌聖なる事を仰くへし」といった類の評がくり返されるのみ。時折、色好み論さえ加わる。むろん、

黒人歌への評釈をみて、「慷慨の情」を感じさせる評はまったくない。

要するに、秋成の創作した人麻呂や黒人像は、同じ人間の追求した歌人像とは一切無関係なのである。それは、近江荒都歌のみに言えることであり、この歌だけが全体から切り離されているわけである。おそらく、近江荒都歌を評釈する秋成には、人麻呂や黒人自身とは関係なく、別の明確な意図があったと思われる。そのために、架空の境遇を創りあげただけなのだ。では、その意図とは何なのか。

3

しかし、これはすぐわかる。「金砂」六が、近江荒都歌への評釈の後で明言しているからだ。「さてこの荒都の物語を。思ふまゝに。蛇に足を添ていはん敷。国史の正実疑ふへからすといへとも。但天智天武の卷々の文義におきて。いささかいふかしむへき事とも。此つい手にしるしおきて。後の論者を待んとす」。

彼は、「国史の正実」〔正史〕とされる日本書紀の天智と天武に関する記述に疑義を挟むのである。要は、天智と天武の関係なのだ。功勳高き天智の強調や、天武政権下における人麻呂、黒人の境遇の創作は、おそらく天智対天武の構図を描くためにちがいない。

以後、秋成は、「遠駝延五登」でも馴染みの歴史観を展開するが、朝廷の骨肉の争いは異国の書によって「禰位纂立の智略」を

覚え「天性の情欲を寡らせた」ところから始まるとの立場から、蘇我父子の横暴、対する聖徳太子や山背王の「善柔の性」、孝徳天皇の踐祚、皇極上皇の重祚、古人皇子の謀叛等に筆は及ぶが、叙述の流れは次第に天智と天武の関係に集約していく感がある。

近江荒都歌を引き金として秋成は歴史観を披歴するのだが、その中で荒都歌にごく近い時点を見ると、「英傑の主」たる天智を差し置いて重祚した皇極上皇への批判がまず目につく。かなり手厳しい。この時の重祚が、後に皇統の連綿性を危機に陥れた孝謙天皇の重祚と道鏡の横暴を生む「毒液」となった、とまで言う。これと反対に、「英傑の主」としての天智の比重が増していくのが特徴である。皇極の重祚は、実際は天智や藤原鎌足の謀り事かもしれぬのに、秋成はひたすら天智の側に立って、「此間の事。史をよむ者。暗中に物を探るに似たり」と、重祚した皇極の意を訝るのである。

さらに、孝徳天皇も巻きこんで皇極を批判する件は注目してよい。秋成からみれば、孝徳は、「善柔の性」のため蘇我氏に押されていた人。その「弱主」たる器量を侮った天智は、勝手に皇極を促して飛鳥に遷都させる。秋成の推測によれば、天智の非礼を憎んだ孝徳は、崩御寸前に帝座を皇極に返して天智の皇位継承を阻む。これが皇極重祚の「毒液」となるわけだが、続けて彼は次のように言う。

上皇もかねて鄭桓の疎みやおはしけん。ことわりしられぬ重祚を受給ふは。弟皇子の大海人をや寵愛せさせ。是にや讓

らんの御心もおはしけん。是そ近江の朝の後無き所由なるへき。

孝徳・皇極対天智の構図に、大海人（天武）が絡んでいる点に留意しよう。皇極が重祚を受けたのは、寵愛する大海人に皇位を譲るためだとする。これは、まさに意表をつく見解である。同じように考える者は、むろんいなかった。ましてや、これを近江朝滅亡の因とする者など皆無である。となれば、やはり秋成の創作だとしか言いようがない。創作によって、彼は、天智と天武とを突き合わせるのである。

次いで、話は天智皇子に及ぶ。皇子の事は〈正史〉では不分明だから懐風藻に抛るべきだとし、その中から「淡海帝之長子也。魁岸奇偉。風範弘深。眼中精耀。顧盼傳燁……年二十三。立為皇太子」の部分を抜粋している。興味深いのは、抜粋の後に続く言である。

この事実史に記さず。鎌公の女のみならず。天武の庶長十市の皇女を結婚の事も、史には見えざるは、日本紀の撰に。用捨のありしを知らる。天武は智略の君。節を屈て人に謙り。克く人の心を買せ給ひしかは。遂に志願をかなへさせ給し也。

壬申の乱で人麻呂や黒人一族が従事したと創作するほどだから、秋成が天智の嫡子天友を鼠負するのはよくわかる。認めはしないものの、大友即位論を唱えた『説史余論』や『大日本史』、『日本春秋』等に理解を示しているのはそのあらわれだ。婚戚を介した

上田秋成の近江荒都歌論について

鎌足と大友との結びつき、十市皇女（天武と額田王との娘）が大友の妃だった事実が載らないのを見て、秋成は、〈正史〉たる日本書紀は故意に大友の存在を消そうとしたのではないかと疑った。

反対に、天武に対する批判的な眼や距離が感じられる。古代律令制の樹立者として国学者からは賛美された天武だが、秋成にかかると、「智略」で要領よく戦に勝利し皇位に就いたかのように描かれる。「節を屈て」人に迎合するなど、秋成の最も嫌うところではなかったか。

こうしてみると、秋成は、天智対天武の構図を描くにしても、天智の側に視座を定めて天武を相対化しているとみた方がよさそうである。人麻呂や黒人は、天武相対化の視座だ。

4

『金砂』六には、まだ特徴がある。この巻が近江荒都歌を中心としているのはいうまでもないが、その前後の歌に対する評釈からも、秋成の意図的な解釈や創作がうかがえるのである。まず、近江荒都歌のすぐ前には、巻一箇の天武御製の長歌「三よし野の。耳我の横に。時無くそ。雪は降ける……」および箇の反歌を載せるが、長歌に対する秋成の評釈は次のとおり。

御代しろしめし給はさりし始に。大津の宮を云逃れて。こゝに避給し時。山河の世に殊なるを思し出で。清見原よりあまた度御幸有て。此おほんをも打出させし也。山深き所は。

雨や雪や。時無く。しき／＼に降にたとへて。行駕の時無きをおほんよませし也。

淡々とした評釈である。というのも、この長歌に天武の直面した政治的危機を読みとる「国学者もいるからだ。たとえば、『僻案抄』は、「此御製は安まろのはかりごとにて、東宮を辞し給ひ、出家し給ひて、はじめて吉野山に入たまへる時の御歌とみえたり。故に山道につきて、隈もおちらずなどよみ給へるも、おもひ残し給ふ隈もなく、天下の治乱をも心にかけてたまへるなるべし」と評した。春満は、皇位継承をめぐる危機の中で天智の追求を逃れるべく出家して吉野に入る天武の心情に思いを馳せている。長歌に、ある種の緊迫感をみる。御杖の『燈』も、「大友皇子の事にて深く世中の事御心にかゝるをよませたまひしにやあらむ」と、同様の危機と天武の心情への理解を示した。が、秋成の評釈には、緊迫感も天武への思いやりもまったくない。

危機とまではいかなくても、この長歌に関しては、大海人が吉野へ入る時点での歌なのか、あるいは天下をとって天武天皇となつた時点からの懐古の歌なのかが問題となつてきた。真淵なども、決めかねてためらいをみせている。だが、秋成にはそんなためらいすらない。頭から懐古の歌とみて、冷ややかに評釈しているだけに思える。

ところが、もう一つ前の額田王の歌を前にすると、評釈の語調が俄然変つてくる(10)「冬こもり。春さきくれば……………」の長歌、(11)「うま酒。三輪の山……………」の長歌および(12)反歌を並べると、特

に(10)への評釈が目を惹く。(10)は、天智が春花と秋葉の彩色いずれか勝ると問うに、鎌足が額田王に判じさせたときれるその判歌である。秋成は、こう評釈した。

(鎌足が)かくさまの事は。ぬか田姫こそさかしきをと。

酌に参りて。御前に在にゆつらせしは。帝の女王の寵遇をおほしてなるへし(中略)天皇は大津の宮の帝也。女王。初めは此帝に召れしか。崩御の後に。清み原の宮に参りて仕へしなるへし。帝の山科の殯宮を退散の時。かなしみの歌あるを証なるを、天武紀に。妃人に見ゆるもて。たゞ清み原の君にのみとおもひて云説はわろし(中略)又三山の争ひによせて。うつし身も妻をあらそふらしきとは、皇太子の御時より。御兄弟ともに懸想やしたまひけん。是も壬申の闘争の端にやと。私には思ふ也けり。

彼が強調するのは、額田王に対する天智の「寵遇」である。殊に、天武紀によつて額田王を天武の「妃人」とだけ考える傾向を強く戒めている。額田王を天武からできるだけ切り離し、天智の側に組み込もうとする意図が明白だ。国学者たちの多くは、春秋争いを風流人額田王に判じさせた歌だとし、彼女の風流心を主に贅えていた。御杖のみが、裏に天智と天武の恋争いを想像するが、それでも躍起となつて彼女を天智にくつつけようとはしなかった。また、『檣の杣』には、額田王の女心の優しさは強調されても、天智の「寵遇」云々は無い。『金砂』の評釈が、かなり意図的であることがわかる。

さらに、三山の争いの長歌(19)に壬申の乱の発端を想像するの
も、秋成だけだろう。国学者は、恋争いはみても、天智、天武、
額田王の三角関係とまでは解さないようである。御杖のようにそ
う解する者でも、壬申の乱と直ちに結びつけるまでには至らな
い。(19)に關しては、作者を額田王ではなく大海人皇子だと鋭く
指摘する真淵の説を充分知っているはずだが、一顧だにしていな
い。大海人を想定することなど、以ての外だったのだろうか。

さて、近江荒都歌の評釈を機に長々と歴史観を披歴した後、秋
成は再び額田王の歌を評釈している。「近江天皇遊_ニ彌蒲生野_ニ時_ニ
」とある(20)「あかねさす紫野ゆきしめ野ゆき……」その「こたへ」
(21)「紫_{アキネ}草_{クサ}のにはへる妹をにくかれは……」である。

^{ムラサキ} 蒲生郡の大野の御狩に。皇太子の魁岸奇偉と云御かたち
に。今日の出立の御装ひのか、やかしきを。見奉りて。かく
もめて言したれば。御答に。君の御見送する妹か姿のにはは
しきを。憎しとまておもへは。言もよせましを。父君の御か
へり見あるからに。恋はよらしと也。この皇太子とあるそ。
大友の御事なるを。天武の御幼名に書改めて。私する人も有
けり。

この歌こそ、皆口を揃えて額田王と大海人との間の贈答歌だと
言っていた。なのに秋成は、これを強引に額田王と大友皇子との
贈答歌にしてしまう。「魁岸奇偉」といった懐風藻の形容に依り
ながら、彼がやろうとするのは、大友の存在の印象づけた。反対
に、大勢を戒めるかのように「天武の御幼名に書改めて。私する

上田秋成の近江荒都歌論について

人も有けり」と言い、天武の存在感を極力薄めようとした。

『金砂』は載せないが、『檜の杣』には、右の意図をより徹底
させるような評釈がある。(19)「綜麻形乃林始乃狭野榛能衣爾著成
目爾都久和我勢」秋成は、春満に従って「みわ山のしげきかもと
のさのはぎのきぬにつきなす目につくわが夫」と訓む)について。
一般にこの歌は、左注に「右一首の歌は、今案ふるに和ふる歌に
似ず……」とあることから、(19)「額田王下_ニ近江国_ニ時作歌、井戸
王即和歌、すなわち「うま酒。三輪の山……」との関連で云々さ
れていた。国学者たちは、(19)の歌が井戸王の和ふる歌にふさわし
いか否かを論じるのが常だった。だが、秋成はまるでちがう。

又私に憶ふ、此歌は、次の蒲生野の御狩に天智の御出立の
装はしきを、殊にめてたく見上奉りてやよみつらむ。さは、
次の小序の次に此歌有て、又皇太子に、茜草^{アカネ}さすの歌をおく
ると云小序も脱し敷と思へど、是はあまりなるしひ言なれば、
筆もいさよふまゝにしるしぬ。

もう、「春雨物語」の口調だ。つまり、評釈というよりは創作だ
ということ、左注などまったく無視して、この歌を(20)・(21)の天智
の蒲生野遊獵時の一環に組み込んでしまった。「金砂」も併せ考え
ると、額田王は(19)でまず天智の「御出立の装はしき」を贅え、(20)
でその子の大友の出立の御装ひのか、やかしきを賞することに
なる。額田王を通して、天智と大友の晴やかな姿が浮かびあがるわ
けだ。小序の脱漏を推測するのは国学者も同じだが、こういう形
で補うなら、推測を超えて完全な創作である。いうまでもなく、

天武の姿はどこにもない。

以上みてきたように、近江荒都歌の前後は、天智の側からの天武相対化の構図で占められていた。天智・大友の賞賛は、天武相対化のためである。『金砂』六のこうした構図の中で、近江荒都歌での人麻呂や黒人の「慷慨」の情がより鮮明になるわけである。

5

近江荒都歌の高市黒人については、「歌のほまれ」と『駕央行』に触れぬわけにはいかない。すでに野口武彦氏が詳しい分析を加えているが、それを参考にしながら、秋成の意図をもう少し追ってみよう。

「歌のほまれ」は、『春雨物語』の「宮木か塚」と「樊噲」の間に入る小篇であり、いわゆる類歌論が述べられる。古人は、ただ見たまま感じたままを素直に出すので、つい同じような詠みぶりすなわち類歌が生じる。だが、これはあくまで偶然であって、人の歌を犯すのとはちがう。人は各々個性があるのだから、類歌など気にせず思うままを素直に詠むのがよい……。周知のように、彼の持論だった。

「歌のほまれ」では、巻六則山部赤人の「わかぬ浦に汐満くれば……たづ鳴わたる」、¹⁰⁰聖武御製「妹に恋ふあごの松原……たづ啼わたる」、巻一則黒人「桜田へたづ鳴わたる……たづなき渡る」、巻七則作者不明「難波がた汐干にたちて……たづ鳴わたる」を挙げて類歌論を展開する。類歌論自体はさておき、ここで留意すべ

きは、やはり黒人の歌が入っていることだ。秋成は、赤人の歌の後にこう続ける。

此時のみかどは、聖武天皇にておはしませしが、筑紫に広継が反逆せしかば、都に内応の者あらんかとて、恐たまひ、巡幸と呼せて、伊賀・伊勢・志摩の国、尾張・三河の国々に行めぐらせたまふ時に、いせの三重郡阿真の浦にてよませしおほん、⁽¹⁰¹⁾の歌、又、この巡幸に遠く備へありて、舍人あまたみさきに立て、見巡る中に、高市の黒人が尾張の愛智郡の浦べに立てよみける、⁽¹⁰²⁾の歌、是等は同じ帝につかうまつりて、おほんを犯すべきに非ず。むかしの人は、たゞ打見らまゝをよみ出せしか、さきの人のしかよみしともしらでいひし者也。

持統・文武朝頃の歌人とみられる黒人が、聖武朝まで生きのびて仕えていたとは考えられない。黒人と聖武とは、時代が明らかになりがちがう。『遠駝延五登』二に「聖武の御製より」前代に、高市の黒人が尾張の国を過て……」とあるから、秋成自身もそれは充分承知していたはず。

にもかかわらず、ここで彼は、時代の異なる黒人と聖武を交錯させた。黒人を聖武巡幸に備えて巡検する舎人の一人として描く。また、野口氏も指摘するように、藤原広嗣の乱の余波を恐れたの聖武行幸は、『続日本紀』では伊賀・伊勢・美濃・近江とあつたのを、「歌のほまれ」はあえて三河・尾張まで加える。これは、羈旅歌八首の中の一首として尾張で詠まれた黒人の例と結びつけ

るための創作にはかならない。

なぜ、このような創作までして時代のちがう二人を交錯させるのか。おそらく、「歌のほまれ」が、単なる類歌論に終始したものでないからだろう。つまり、ある明確なモチーフを含んでいるということだ。

予め言ってしまうば、黒人の視座からする聖武の相対化である。近江荒都歌では、すでに亡き天智が現政権の天武を相対化した、ここでは、史実では亡きはずの黒人が現在の聖武を相対化するという構図。黒人は、いわば異空間からの侵入者である。「金砂」三には、聖武、黒人、作者不明の歌を並べて載せるが、聖武の行幸に三河と尾張を加える創作はないものの、何か意味ありげな眼差しが感じられぬでもない。また、「歌のほまれ」の文脈では、赤人と聖武という同時代人の歌を並べて前者が後者を犯したのではない旨述べるのが本筋らしいが、それも、黒人による異空間からの相対化によって、赤人の聖武からの自立を云々しやすいうように地均をしている感がある。

ところで、聖武行幸が近江の地を含んだ上で異空間の黒人と接する以上、近江荒都歌とも交錯する可能性は当然考えられよう。

『駕央行』は、まさに、黒人の近江荒都歌と羈旅歌八首とで聖武を挟み打ちにしたような作品だった。

昔、高市黒人くろくうという男がいて、公の使で近江美濃尾張を経て遠江の国へ行くよう仰せつかる。急ぐ旅でもなかったので、賢く美しい妻の小弁に懇願され、「老たる従者」とともに忍びで同伴す

ることになった。「金砂」六にも挙げた巻三の「高市連黒人近江旧都歌一首」の左注に、「右の歌は、或る本に曰はく、小弁が作そといへり。いまだこの小弁といふ者を審らかにせず」とあり、同巻の「黒人妻答歌一首」があるが、秋成は、これらを参考に、小弁を黒人の妻に仕立てあげたことになる。

一行は、まず近江の国に立ち寄り、父兄が生まれ仕えたが今は廢墟と化した大津の宮前に行む。そして、黒人は、「今の御時には忍びにも語るまじき古ことなるを」と、時勢を憚りながらの歌を詠む。但し、「今の御時」とは、天武朝ではなく聖武朝を指す。後に小弁が、のの黒人歌を聴き、「今の上の伊勢の国に御幸の時のおぼんとて洩り聞き奉る」としての聖武御製歌を思い出しているからだ。さて、黒人の嘆きを耳にした妻の反応は、

我しらぬ昔の事ながら父母の語り聞せ給ひて、かゝるまじきはじめ終のいといふ悲しかりしには、この御跡一たびはいきて見まし、いないき見ではとさへ思ひ乱れしを、今日こゝに來てこのあはれなる事をも聞せ給へるにはとて、いといたう悲しげなる声してみそかによめる。(のの歌)。さすがに心弱きは身にしむばかりなり。長居せばいきす魂のさそひやせんとてやう／＼立ち去る。

である。妻もまた、壬申の乱で亡びた一族の縁者だった。そして今、廢墟を前に大そう悲しげなる声でのの歌を詠む。ならば、こう言えないだろうか。「いきす魂」の誘わんばかりの状況下で、このとき二人は、近江荒都の靈、壬申の乱で滅亡した一族の靈を

背負うことになつたのだと。異空間からの来訪者だ。

近江荒都の霊を背負つた二人は、羈旅歌八首中の例・例・例を詠みながら、堅田の浦、松崎、高嶋の勝野の原、比良の泊を経、不破の関を越えて美濃に入る。美濃で公務を済ませてから、いよいよ類歌論で挙げられた例の歌の詠まれる尾張に入った。

汐なき渡りをさへいと覚束なかりしを、此海辺に来て見渡せば、茫まうと雲と波のけぢめなく限り知られぬにぞ、神代より語り伝へしわたつ海の上め給ふ御国にやと、かつ恐しくかつはめづらかなり。

尾張に足を踏み入れた途端、あたりは幻想的な霧困氣に包まれたようである。それを背景に、黒人が例の歌を詠むと、妻の小弁が、聖武御製歌を想起し次いで赤人の歌を並べ類歌について黒人に質す。そこで、黒人が例の類歌論を滔滔と繰り広げることになる。

こうした幻想的な霧困氣の中での類歌論の展開は、近江荒都の霊を背負つた二人が、類歌論を通して聖武と向かい合いこれを相対化していると言えないだろうか。二人は、聖武を近江荒都の異空間に引き入れているのではないか。

三河の国の二見で二人は一応別れるのだが、そのとき黒人は、例「妹もわれも一つなるかも……別れかねつる」の歌を詠む。「檣の杣」三上の評釈には、「是は三河の国に任官をはたして都にかへる度に、妻は先二見と云所より都にかへして、おのれは所々を見めぐりつゝ、後に帰り参れるかと云り。三河を立出て、尾、近

撰城の四国を経つる道ゆきふり也」とある。つまり、野口氏も言うように、道程が「駕央行」とは反対回りなのである。思うに、あえて逆方向の設定をしたのは、「駕央行」が、近江荒都の「いさす魂」を背負つた黒人と小弁を聖武に相対させる構図を描きたかつたからだろう。滅亡した一族の異空間から、類歌論の形をとつて時の権力者聖武を相対化するのである。近江荒都歌の射程は、天武のみならず、聖武にまで延びてくるというわけだ。

事実、秋成は、聖武に対してはかなり批判的だった。卷十八^四の長歌「賀陸奥国出金時。詔書」歌「および反歌に対する『金砂』九の評釈に、「歌のほまれ」に出ている聖武の行幸と広嗣の乱との関係が述べられている。

「天皇。広継か反を恐たまひて。美濃伊勢までも車駕を巡らせて。杳の筑紫に避たまふは。内応あらんの叡慮にもや。かく柔弱の主におはせしを。聖とや申。武とあかむる。御諡こそふきはしからぬよと。かしこみながら誰もみそか言し奉る也」。

乱の余波にビクビクする「柔弱の主」、聖武の名にはふさわしくない天皇、なんて言われては聖武も形無ではないか。広嗣でさえ、「小人の剛直」とぐらいは評価されてるのに。その他、全体にわたって、仏教の奴となつたり華美に流れたりして上古の質朴さ¹¹「国風」が失われたこと、遷都や大仏造営で民衆がすっかり疲弊したこと等、批判的言辞が綴られる。すぐ前では、卷二十^四大伴家持の「羈旅歌」を挙げて、「言霊の妙用を得たる真言の道」、「祖先の忠誠を守りてありがたき人」と高らかに賛えているだけにま

るで対照するかのようによに聖武への難が目立つのである。

6

秋成の近江荒都歌論には、天武と聖武の相対化というモチーフがあることを述べてきた。だが、これは、「天武の御系統も。称徳に断え給へるをおもへは……」の言い方から推して、天武↓持統↓草壁↓文武↓聖武↓孝謙(称徳)全体の相対化だとみてよいだろう。この系統は、いわゆる「正史」の核をなす系統である。そして、秋成の近江荒都歌論の行き着く先は、次にみる「正史」への疑義だった。

国史は正史の証とすへき事。もとよりの詔令ながら。和漢共に時を憚りては。いさゝかのたかひある事。他の書によりて知らるゝもあれと。たゞ朝廷にたかはゝ。いみじき罪なるへければ。無益の穿鑿にはわたるましきを。此大津の宮の荒しを悲しめる歌の意につきて。かくまで長物かたりはすなりけり。

天武↓聖武を核とする「国史」は、「正史の証」⇨「正史」として決して完全ではなく、時の権力の都合による増補削除の結果である旨述べられる。近江荒都歌は、どうやら「正史」から消された歴史にかかわっているようだ。

「正史」の祖ともいべき日本書紀に関し、周知のように秋成は、三度にわたる撰録の過程をみた。天武の御世の川島皇子等による撰録、和銅七年に元明の詔を承けた紀清人、三宅の藤丸等に

上田秋成の近江荒都歌論について

よる撰録、そして養老四年の元正の勅旨を承けた舍人親王による撰録。訝りながらも、彼はその理由を次のように考える。

かく次々の御代に。史の撰の改りしは。皇極下居の御時より。大津の宮の亡びし事蹟を。前の二史にはあからさまにや有けんを。忌かしこみて。元正の内勅を賜はり。舍人の君の刪補ありしかは。是を叙慮にかなひて。前の二史は廢せられ。たゞ此日本書紀をのみ正史として。後代の朝に講義せさせ給ふにそあらめ。

そして、天智の血を引く川島皇子や元明のかかわる前二史には、未だ壬申の乱や大津の宮の生々しい事蹟が残っていたが、完全に天武系である元正と舍人親王によってはじめて撰録は完成した、と述べている。

秋成に言わせれば、撰録の過程での課題は、いかにして大津の宮滅亡の事蹟を消すかにあった。舍人親王の「刪補」で整えられた日本書紀は、天武系を賛えると同時に、天智の大津の宮の側に立つ言説を一切闇に葬り去ってしまった。これを、「正史」として無条件に崇めることはできない。「正史」は、相対化される。

近江荒都歌は、秋成にとって、まさに「正史」の裏側に通じる回路だった。それは、異空間から響いてきて「正史」を相対化する。近江荒都歌の霊が、「正史」とは何だろうということを常に考えさせる。

だが、重要なのは、秋成の近江荒都歌論の意味が単にそれだけにはとどまらない点である。要は、「文献」をめぐる歴史意識の

転換を迫っているところにあるのだ。

彼は、日本書紀論に入る前に言う。推古朝で撰んだ天皇紀・国紀は、蘇我氏滅亡とともに火中に消え、余燼ありて近江朝に蔵められるも壬申の乱でまた焼失した……。つまり、ここで〈文献〉の完全性は失われているわけである。〈文献〉の不完全性という点が、彼の論の出発だった。古事記から古のありのままを導き出そうとした宣長とはちがう。この点は万葉集に関する次のような言でも明らかだ。「古典籍と云も。村上の天徳四年の火にかゝりて。原書は世にとゞまらず。今伝へしは。撰者の家記の余燼か。或はこゝかしこに散残れるを。輯録して。全を成せる者なれば。いかで補闕脱漏のなからんやは」〔金砂刺言〕。

したがって、彼によれば、〈文献〉は、絶えず「補闕脱漏」を繰り返す。〈正史〉たる日本書紀も、その過程で生まれた相対的なものだ。だからといって、彼は、今さら失われた〈文献〉の完全性を取り戻そうとはしない。むしろ、彼の関心は、どのような事情で、何を、いかに「刪補」「補闕脱漏」したかに赴いた。正しい〈文献〉の原像を求めるよりも、〈文献〉の「刪補」過程そのものに関心を示す。

なぜ、そのような過程に注目するのか。いうまでもなく、そこに、流動するテキストの示してくれる多様な〈歴史〉が開かれていくからだ。〈文献〉を不完全なものにした動く〈歴史〉こそ、秋成の最大の関心だった。折口信夫は、万葉集を完結した歌集とみるのではなく、「雑然たる古歌集の集団」だとし、その増補過程

に「ある一種の時代反抗と氏族の誇りと、多大の遊戯分子とが含まれてゐる」と推測する⁽⁶⁾。テキストの流動から動く〈歴史〉をうかがうこうした眼は、撰者の家記の余燼や散乱を云々する秋成とも無縁ではなかったはずである。

国学は、〈文献〉の完全性を求めた。「刪補」の事実があれば、それを後世人の「さかしら」だと斥け、あくまで正しい〈文献〉に向かおうとする。その代償は、「刪補」の過程の語る〈歴史〉を閉じこめることだった。秋成の近江荒都歌論は、〈歴史〉を〈文献〉から取り戻す回路でもある。〈文献〉のあり方をめぐる秋成と国学との関係は、なお様々の角度から追求されねばならない。

〔注〕

(1) 秋成の「金砂」六に載る近江荒都歌を掲げておく。

(2) 玉たすき。畝火の山の。かし原の。ひしりの御代ゆ。あれまし。神代のこと。つがの木の。いやつきく。天の下。しろしめし。を。空に見つ。大和をおきて。青によし。奈良山をこえ。何方に。おもほしめすか。天さかる。鄙にはあれと。石走。あふみの園の。さ。波の。大津の宮に。天の下。しろしめしけん。すめるきの。神のみことの。大官は。こゝと聞けとも。大殿は。こゝといへとも。春草の。しけくおひたる。霞たつ。春日のきれる。百しきの。大官所。見れはかなしも。

(3) 佐々浪の志我の唐崎さきかかと大みや人の舟待かねつ

(4) さ。なみの滋賀の大わたよとむともむかしの人にまたあはめやもいにしへの人に我あれやさ。浪のあれたるみやこ見れは悲しも

③ さくなみの国つ御神のうらさひてあれたる宮こ見れはかなしも
④ かく故に見しとふものをさく波のふるきみやこを見せつゝもとな

(2) 森山重雄『上田秋成 史的情念の世界』(三一書房)の七「人麻呂
・黒人の近江荒都歌」、野口武彦『秋成幻戯』(青土社)のⅢ「歴史
の落丁と物語の乱丁」

(3) 『金砂』六は、卷三④「あふみの海夕波千鳥汝かなけは心もしの
にいにしへおもほゆ」も参考にあげている。

(4) 森山『前掲書』は、「秋成独特の見解である」としている。

(5) 野口『前掲書』

(6) 折口信夫『万葉集私論』(『折口信夫全集』第九卷所収)

(7) 『春雨物語』を生み出す眼であるのは、いうまでもない。

*秋成の著作のうち、『金砂』と『楢の柚』は中央公論社版『上田秋成
全集』に、「歌のほまれ」は岩波版の日本古典文学大系『上田秋成集』
に、『鴛央行』は藤井乙男編『秋成遺文』(国書刊行会)に依った。
但し、適宜、現代表記にあらためた。

(やました・ひさお 金沢女子大学助教授)